

きらやか銀行

——日本語雑記・十——

工藤力男

合併と名づけ

先年、平成の大合併とよばれた地方自治体の統合によって、日本じゅうに珍奇な地名が生まれたことは記憶に新しい。西東京市、伊豆の国市、南アルプス市、いちき串木野市などはその最たるものだろう。規模の大きな自治体と相対的に小さな自治体が合併するときは吸収の形をとるので、小さい方に不満はあっても、もめることは少ない。その規模にさしたる差のない自治体どうしの合併ではそうはいかない。あちら立てればこちら立たず、結局、新しい名称を考へることになり、右にあげたようなことになるのである。谷川健一さんは、このたびの合併による命名のベストス

リーとして、長野県千曲市、奈良県葛城市、石川県白山市をあげている（『夕刊読賣新聞』「消えゆく地名」①（2004.4.26）。千曲市を筆頭にあげたのは、あの恥ずべき「更埴市」の消滅を喜ぶのだろう。わたしなら、まず古代の郡名を復活させた福岡県嘉麻市を推す。広い地域を大まかにさしていた地名による長野県安曇野市もいい。岐阜県瑞穂市の嘉名は、巢南・穂積二町の合併で、「穂積」のホヅミを逆さに読んだものらしい。突飛ではあるが、着想はおもしろい。

事は自治体の名称に限るわけではない。銀行の合併にもそれは見られた。代表的なのが「三菱東京ユーエフジェイ

銀行」。「UFJ銀行」自体、その数年前の合併で生まれたわけのわからない名称なのだから、今度のはそれに輪をかけたものである。合併ではないが、山陽相互銀行が普通銀行に転換して「トマト銀行」に改名したときは、ひとときり話題になった。意外性、健康らしさ、明るさが好感された、巧みな命名であった。

昨秋、成城大学の大学院に席をおくK嬢からの電便の終りに、新宿で「きらやか銀行」という看板を見つけたが、この名称は日本語として少し変ではないか、違和感があるという趣旨の文言があった。その銀行名は、わたしも四年前、山形県鶴岡市への旅で街頭にみて奇異に感じていた。そこでわたしは、その違和感の由来についていづれ書きたい、と返信したのであった。

「きらやかホールディングス」傘下の「殖産銀行」と「山形しあわせ銀行」が合併して、東北第二の地方銀行「きらやか銀行」が誕生したのは二七年五月。わたしがその名を見たのは同年八月、うまれて三ヶ月後のことであった。その新しい銀行は、今年十一月、さらに仙台銀行と合併する予定であったが、東日本大震災の影響で中断したままだという。

違和感の由来

K嬢が銀行名の「きらやか」に違和感をいだいたのはなぜだろう。

まともな日本語話者なら、「きらやか」について、これが、まず擬態語「きら」と接辞「やか」による語であること、形容動詞の語幹であることを理解するだろう。そして、《語基》「きら」による派生語として、「きらり」「きらきら」も容易に思いうかべるだろう。そこで、現代日本語の中に、「くら」の形をとる二拍の語基から同様に派生したとみえるものを五つだけあげてみる。

| | | |
|----|-----|------|
| グラ | グラリ | グラグラ |
| サラ | サラリ | サラサラ |
| チラ | チラリ | チラチラ |
| ヒラ | ヒラリ | ヒラヒラ |
| ユラ | ユラリ | ユラユラ |

いずれも「くらヤカ」が接して、サラヤカとかヒラヤカとかになることはない。これが妥当な解釈だとすると、キラヤカが現代語としては成りたちにくそうだと思通せるだろう。

K嬢が古代日本文学を学ぶ若人であることを考えると、

奈良・平安時代の語彙から「うら」を思いうかべたかもしれない。そこで、こちらの派生関係をみる。古代語とはいっても、奈良時代と平安時代とでは異なる点があるのだが、ここではわけない。

ウラ ウララ ウラウラ ウララカ

ウラからの派生語は三形とも今なお用いられる。それにキラを並べると、

キラ キララ キラキラ キララカ

このようにきれいに対応するが、現代語で活発なのはキラだけ、ウラ系とは比較にならない。

「きらら」が雲母の和語であることを知る人は多くあるまい。近年生まれた稲の品種「きらら367」によってこの語形を記憶している人のほうが多いかもしれない。それとの関係はしらないが、インターネットのフリー百科事典『ウィキペディア』によると「きらら」は、月刊の小説雑誌、漫画専門誌、山口県の地名と観光施設や商業施設などの名になっている。道の駅「きらら」も耳にする。稲の品種名が引き金になって広がったのだろうか。

ウララカが現代も一般的であるのに対して、キララカの使用例を思いうかべることは難しい。わたしは、辞書・索引

類によってようやく、栄華物語、夜の寝覚、大鏡、今昔物語集、徒然草などに少し用例のあることを知るだけである。今昔物語集には四例ある。その一つを日本古典文学大系本からひくと、「長高ク、見目綱ラカニシテ、力強ク足早ク」(巻第廿九の第三十話)とある。同集には「綱々ク」「綱シキ」もあり、キラの表記はこの漢字でまとめようとした節がある。それが他の文献の表記と重ならないところが問題なのだが、本稿の主題からされる。ただ、キラ系の語は漢文脈系の文章に多くみえることを指摘しておく。主に男性社会に行われた語なのではあるまいか。

以上、K嬢の違和感の由来を探って、キラ系の諸語をめぐるかこれかいてきたが、真相はもっと単純だったかもしれない。なぜなら、わたしが「きらやか銀行」に違和感を覚えたのは、とっさにキラビヤカが想起され、他の語形は一切うかばなかったからである。K嬢も同様だったのではあるまいか。

「きらびやか」とその周辺

現在も普通に用いられるキラビヤカについて、わたしはこれまで特に考えたことがない。そして、本稿のために辞

書を練って意外な事実をしらされた。この語は平安時代には用いられなかったらしいのである。

文献の初出は鎌倉時代中期に成った語源辞書『名語記』らしい。勉強社の翻刻版から巻十の当該箇所をひく。

キラヒヤカ如何 キラハミヤカナリ。(31オ)

『名語記』になじみのない読者のために一言する。答えの「キラハミヤカ」は、著者の経尊が、キラヤカをキラとヤカにわけ、その間に「ハミ」を入れたものである。これを入れたのは、漢字音を説明する「反切」法はんせつを和語に当てはめて構造を説明するためである。「反切」法は中近世によく行われたが、日本語にとつては合理性のない解釈法である。

ごくまれにしか濁音を表示しない同書で、この項目の次項は「キヤウエウ」の解を「杏葉」としている。したがって、本項のハミのハが濁音 [ba] であることは動くまい。そこで反切のハ行子音を σ にかえて簡単に説明すると、バミすなわち [ba mi] の上の拍 [ba] の子音 [b] と下の拍 [mi] の母音 [i] をあわせると、新しい拍 [bi] になる。かくてキラビヤカという語がうまれたというのである。

『日本国語大辞典』第二版(小学館 2001)。以下、「日国大」と略記)はヤカを接尾語としているが、他の辞書はこの語の構造についておおむね言及していない。なぜか。

キラビヤカを耳にして古語「雅びやか」を思いうかべる人も多いに違いない。かく申すわたし自身がそうなのだが、ここでもまた意外な事実をした。諸辞書のあげるミヤビヤカの初出例は鎌倉時代のものである。この意味にあたるかと思われる平安時代語は「雅びか」で、源氏物語、紫式部日記、枕冊子などに用例がみえる。「雅びか」が動詞「雅ぶ」の連用形からの派生であることは動かない。

ミヤビヤカはミヤビカから出たものであろう。接辞「ヤカ」が接辞「カ」に取ってかわったのである。かかる経過で成立した鎌倉時代以前のヤカ語幹の語としては、コマヤカ「細」、シツヤカ「静」、ツツマヤカ「約」など甘語ほどがしられている。

さて、この型で、ブ語尾の動詞から派生したものを拾ってみると、まず「忍びやか」「軽びやか」がある。第二拍の「ひ」が清音か濁音か、そして一語か別語「織／聳」かの議論が尽きない「そひやか／そびやか」もある。「伸びやか」は現代語にもいきている。ほかに「なびやか」があ

るが、これは、動詞「靡く」の連用形「なびき」から派生したのではない。「なびく」の前身として仮定できる「なぶ」に由来すると解すべきで、他の諸語よりも古い成立だということになる。蜂矢真郷さんの『国語派生語の語構成論的研究』（塙書房 2010）によると、ほかにアテビヤカ「貴」、ウヤビヤカ「恭」などがある。

キラビヤカに戻ると、語基と接辞に挟まれた「ビ」はうまく処理できない。現代の諸辞書が記述を控えるのも当然である。中世、キラに漢語「綺羅」をあてることも行われたので、通俗的な字書に、キラビヤカを「奇羅美／寄羅美」とした心情も理解できる。

かくて、キラビヤカはミヤビヤカに類推して成立した、というのがわたしの解釈である。

接辞さまざま

日本語の古代、形容詞は十分に発達することがなく終ったために語数が少ない。それを補うように発達したのが形容動詞だといわれる。これは語幹と語尾が分離しやすいので、形態論・品詞論で議論の尽きぬ厄介者だが、その反面、今なお新語を生産し続ける活力をもっている。本稿は、

「きらやか銀行」という名づけへの違和感から出発したが、わたし自身にはそれ以前にいくつかの課題があった。

高等学校一年の漢文の時間に高駢の七言絶句「山亭夏日」を学び、その起句「緑樹陰濃夏日長」の「濃」を「こまやかにして」と訓読することを教わった。辞書には「こまか」「こまやか」は同義だとある。それ以来、自分の独断で、微にして小なるさまを「こまか」として漢字「細」でかき、濃く深いさまを「こまやか」として「濃」「密」などでかく、という使いわけを心がけてきた。

大学二年のとき、土佐日記をよんでいて、二月八日の条の「あるひと、あざらかなるものもてきたり」に出あった。「あざらか」は「鮮やか」と同義だが、「鮮やか」が美的な形容を専らにするのに対して、「あざらか」は魚肉などの鮮度をいうとのことであった。そこに古代語の奥ぶかさを垣間見たような気がし、できたらその由来が究めたいと思った。

「きらやか」のように、語幹末に「やか」をもつものを《ヤカ語幹》と仮称し、他の語幹も同じように《カ語幹》《ラカ語幹》と仮称する。それらの語幹による派生語はどれほどあるだろうか。『日本文法大辞典』（明治書院

| | カ | ラカ | ヤカ | ヨカ |
|-----|----|----|-----|----|
| 古代語 | 41 | 40 | 48 | 4 |
| 広辞苑 | 45 | 46 | 104 | 8 |

1971)の「接辞」の項には、しらかしのりゆき白藤禮幸さんによる【派生に関する接辞・語彙一覧】がある。平安時代までの主要な文献廿五作品(今昔物語集は巻第廿四まで)の調査結果だという。それと比べるために、現代語を含む『広辞苑』第四版(1991)に基づく『逆引き広辞苑』を用いる。この二つは、語の採録基準が異なるし、対象文献の幅も違い、語構造の解釈も同じではありえない。だが、大まかな把握はできるだろう。

古くは、語基の語音の関係で接辞ヤカの母音が交替してヨカになることもあった。なお、「軽」にはカルとカロを一括して数える。ヤカ語幹とした「穏やか」は、古くは「おだひか」で、鎌倉時代に音転して今の形になったものである。ともあれ、その二資料でえた数値を並べてみよう。大局的にみると、鎌倉時代以後は、カ語幹・ラカ語幹の語は余りふえず、ヤカ／ヨカ語幹ばかりが増殖した感じである。

これについては、学界ではおおよそ共通の理解がえられている。ここで若干のことを確認しておこう。ヤカは、古い接辞のヤとカが合して成立した二次的な接辞である。ヤ

カとラカは、「いかにもその感じがする」といった意味を表わすとされ、両者には意味の違いがあったはずである。その違いを主張する論もあるが、平安時代中期以降、両者の差が不明瞭になり、ヤカが優勢になった。その結果が右の数値である。

形容動詞は貪欲

一つの語基に各種の接辞がついた語幹の実態をみる。ここでは、ヤカ語幹に焦点をあて、派生の状況を四つの型にわけて若干の語を例示する。時期を限らぬ汎時論的な概括である。

第一の「形容詞―ヤカ語幹」型の対応は、「青し―青ヤカ」「近し―近ヤカ」「長し―長ヤカ」などがある。『古典対照語い表』(笠間書院 1971)によると、「青やか」は、枕冊子に一例、源氏物語に五例みえる。前者は、新日本古典文学大系本の第二段の正月条、「七日、雪まのわかなくみ、あをやかにて」である。新春の野辺の雪間にみた若菜の印象を、いかにも新春らしいと捉えた解釈は、ヤカの辞書的な意味に合致するといえよう。ここには省略した「形容詞―ラカ語幹」の語も当然多い。

第二は「カ語幹—ヤカ語幹」型の対応で、「静か—静ヤカ」「確か—確ヤカ」「豊か—豊ヤカ」などである。この型は語数が多いばかりでなく、そのいくつかは、後述するように、現代まで続く息の長いものである。

第三は「ラカ語幹—ヤカ語幹」型。「麗らか—麗ヤカ」「伸びらか—伸びヤカ」「晴れらか—晴れヤカ」などがある。既述のように、ラカからヤカに転じた語も少なくない。

第四の型は、右の第一・第三の型がまじったともいうべき「形容詞—ラカ語幹—ヤカ語幹」型で、「高し—高らか—高やか」「緩し—緩らか—緩やか」「軽し—軽らか—軽ヤカ」その他がある。形容動詞の派生法の変化、生成の貪欲ぶりを語るものである。

この型の「高やか」とその類語は変な語である。『新明解国語辞典』第六版のあげる用例「高らかに響くファンファーレ」は典型といえるだろう。「音が高い」というとき、日本語はかなり曖昧で、音程の高さも音量の大きさも表現できる。右の例文で、音程や音量についてなら「高く」でもいいはずだが、そうはせずに「高らかに」を用いるのは、この辞書が語義記述にそえてある（「誇らしげに」「ゆえであるう。その行為の晴れがましき、誇らしき、勇ましき

捉えた表現で、「いかにも」といった主観的な意味をそえるという、ヤカ・ラカの役割にまさにふさわしい。

平安時代語では事情が違った。今昔物語集の「高やか」は、送り仮名の不備を補ったものも含むと十二例、すべて「高やかに」の形である。日本古典文学大系本の第五冊は、卷末補注の「接辞」の項で詳しく考察したが、源氏物語と同じく「高やか」しかみえないので、ヤカとラカの区別のほどは不明だとしている。同集の用例のうちの二例は、「匙^{カヒ}ニ飯^{イヒ}ヲ救^{スキ}ツ、高ヤカニ盛^{モリ}上^{アゲ}テ」（廿八の廿三）のような視覚に関する表現で、現代語なら「高く／高々と」とするところだろう。

平安時代、ラカ語幹からヤカ語幹への移行が進んだことは先にかいた。だが、中世の軍記物では逆に「高らか」が用いられ、それが一般化して今日に至っている。軍記物ではヤカの柔らかな語感がさけられたようである。それは理解できる。

ヤカ語幹隆昌の背景

平安時代初期に一度は衰退したヤカ語幹が中世以降に盛りかえしたことは、諸氏の研究で明らかにされた。辞書の

初出例からもおおよそ知られるし、『逆引き広辞苑』から導かれた数値の語ることもある。このように中世以後に盛りかえしたのはなぜだろうか。

鈴木丹士郎さんの『近世文語の研究』（東京堂出版

2003）全十四章のうち、第十一二章は「ヤカ型形容動詞の広がりとその性格（上）（下）——曲亭馬琴の読本の場合を中心として——」である。緻密な調査と考察でみだされていく同書から、その成果をかき取る。

形容詞によるヤカ語幹に関する著者の記述は、五十音順に「青やか」から始まる。『好色一代女』『日本永代蔵』から「あをあを（と）」を用いた箇所をひき、これは口語的で、「あをやか」は雅語的であったのではないかと述べ、次のように敷衍している。

このような意識は今日にも及んでいると考えられるし、雅俗意識と形容動詞・副詞という語の性質の違いと対応するのは他の場合にもみとめられる。

これはこの二章の結論ともいえるもので、このまま首肯していいと考える。

このたぐいの造語は曲亭馬琴の得意とするところであった。その実態をつぶさに記述した著者は、この造語法が明

治期以降の擬古文、翻訳文、雅俗体の文章、和歌を初めてする短詩形文学、さらに日常語のレベルにも及び、あらわな強さなどを包んだり、力みなどをやわらげたりする表現として今日にあることを指摘している。美化・隴化を意図した表現なのである。

例によって気ままに拾って書きとめた我がカードに、興味ぶかい用例がいくつかある。例えば、『鷗外選集』第十卷（岩波書店 1979）所収の『於母影』中の一編「ミニヨ」の歌に、「青く晴れし空よりしづやかに風吹き／ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く」とある。ゲーテの原詩は何に拠ったか、そのテキストを突きとめることはわたしの手に余るので、渡辺美奈子さんのウェブサイト（www.ne.jp/asahi/minako/watanabe/mig.htm）の「ミニヨ」 2003 から借りると、『ヴァルヘルムマイスターの修行時代』第三巻第一章の原文は“Ein safter Wind von blauen Himmel welt/Die Myrte stül und der Lorbeer steht”である（波型の傍線・下線は引用者附す）。safter と still の語義の差を、ヤカとカで示したつもりだろうか。この訳詩は、じつは鷗外の妹・小金井喜美子によるのだともいわれるが、ここの論述には関わらない。ちなみに、渡辺さん

の訳は「柔らかない風」「静かに」、潮出版社版ゲーテ全集(1982)の前田敬作・今村孝訳は「そよ風」「しずかに」である。

近年の例に、『漢語日曆』(岩波新書 2010)の八月の条がある。三日は白居易の詩をひいて「心静かだと身も涼しくなる」とあり、四日は王維の詩「納涼」について「いかにも涼やかな光景だ」、十二日は成島柳北の「夜婦」を釈して「月明かりの川一面に浮かぶ舟が涼しげで」とかき、廿日は杜甫の詩について「このいかにも涼しげな情景」である。四日と廿日では、同じ「いかにも」で主観的把握である旨を表明しながら、「涼やか」と「涼しげ」で異なっている。

涼しさを捉えた現代の情態表現には、推量辞の加わった「涼しそうだ」もある。これはふつうの話しことばで、「涼しげ」は書きことばに属する。わたしの「ヤカ」カード中の多数派に属する「涼やか」は、限りなく話しことばに近い書きことばになっていると思う。

「涼やか」は不思議な語である。そもそも接辞ヤカは、シク活用形容詞には語幹末の「し」形態に接するはずである——をかしやか、おとなしやか、つつましやか、まこと

しやか等々。「涼やか」だけが特異なのだが、これについて論じたものをわたしは知らない。考える手がかりの一つは、形容詞「涼し」に対応する動詞が、古代以来「すず」を語幹とする「涼む」であることだろう。室町時代には他動詞「涼しむ」があったが、早く衰退してしまった。かくて、他のシク活用形容詞に対応する動詞「悲しむ」「苦しむ」「親しむ」等と比べて「涼む」は特異性が顕わである。ほかに、江戸時代以来の複合名詞「すずかせ」もある。

形容動詞の増殖

右にもかいたように、高校時代以来、わたしは自分の基準に基づいて「こまか」と「こまやか」を使いわけてきた。むろん、微小なもののみとまりは、濃さ・深さで捉えられるので、両語が交錯するのは当然である。まともな日本語話者なら、そう考えるはずである。きめ(木目・肌理)については「細か」というのが当然だと思っていた。江戸時代の文献には「きめこまか」もみえる。もし「きめこまやか」だったら、六拍は長すぎて連濁してゴにはならなかつただろう。だが、近年は「きめこまやか」に接する機会が多い。いずれが本来の形かと尋ねられたこともある。

ヤカ語幹による形容動詞で、出現頻度からみた一方の横網が「涼やか」だとしたら、他方のそれは「甘やか」だろう。ことばを美化して靡ろに包むことを好むこの時代、ヤカは「甘い」にこそふさわしいと感ずるのだろう。味覚には関わらない文脈で、「幼い日の甘やかな時間」「恋の甘やかさ」「甘やかな好奇心」「甘やかに恨んでいる」「官能の甘やかな充足」「未亡人甘やかな吐息」など、文章の公私、硬軟、長短に関わらず多用されている。三十年前、連句の研究家二人が巻いた歌仙に「葉巻の匂ひ甘やかなパパ」という句もあった。古語らしく、かつ現代語らしく、しかも字数の調節に都合なのだろう。本稿では考察を省いたが、「静やか」も文筆家に好まれる語である。

このように形容動詞は増殖し続ける。本稿はヤカ語幹に限って見てきたが、ラカ語幹にも、動詞の連用形による「純みらか」など、未然形による「誇らか」なども作られた。かかる新造語は、詩歌、改まった文章から日常語にも及び、日本語の情態表現の多彩化に貢献している。だが、便利さに甘えて使いなれると、その意図が捉えがたくなることもある。

一例として、窪田啓作訳によるカミュ『異邦人』（新潮

社版 世界文学全集39 1960）の一節を掲げる。

私のいる場所からでも、あの乳房の軽やかな重みが、手にとるようにわかった。(p.68)

これは訳に凝ったものかもしれない。カミュ全集の中村光夫訳（新潮社 1972）には、「乳房の軽い重味が」とある。原文をみると、ガリマール社版（1942）に拠った *foliopius classiques* のテキスト（2003）には “poids léger” とある。なるほど右のように訳してもいいはずだが、日本語としてはいかにも落ちつかない。なお、窪田訳には「どこまでも同じ輝やかな野原だ」（p.15）もある。

今年九月十一日の朝日歌壇、永田和宏選による入選十首の筆頭は次の歌であった。

あはやかな恋もありけりいにしへの巴里のホテルはまだ二ツ星

選評によると、選者は迷うことなく「あはやか」を「淡い」の意に解したようである。口語ではなく文語でもない「あはやかな」を用いたのは、先の連句の「甘やかな」のありかたに似ている。この語は、わたしの集めた用例にも、身辺のいかなる辞書にも見あたらない。「さはやか（爽）」に類推してうまれた語であろうか。

新しい銀行名「きらやか」誕生の背後にはこのような事情があった、とわたしは考えている。考察のきっかけを与えてくれたこの銀行、震災からの復興の歩みが遅々たる現実の中で、合併話は進展しているのだろうか。

（二十一年十二月 完）